作文部門

①思いやり　②ふれあい　③たすけあい　を
テーマにしました。

小学校低学年の部

最優秀賞

たすけあい

南小学校　二年　畑山　楓卯花

わたしのちかくにあるたすけあいは学校に行くときの見まもりをしてくれる人がいることです。町内会の人がボランティアで車どおりが多かったり、しんごうのないおうだんほどうのところに立ってわたしたちがあんぜんにどうろをわたれるようにしてくれています。車が多いとまっていてもどうろをわたれないときもあるのでとてもありがたいとおもっています。えがおであいさつをしてくれたり、「きょうもあついね。」などと声をかけてもらえるのでうれしいです。いつもわたしたちのことを気にかけてくれているんだなとかんじています。わたしもきかいがあればボランティアかつどうをやってみたいとおもいました。

学校では、わたしがころんでけがをしたときにともだちにかたをかしてもらってほけんしつにつれて行ってもらったことがあります。やさしいし、わたしのことをとてもしんぱいしていることがつたわってきました。「ほけんしつまでつれてきてくれてありがとう。」といったときにともだちがわらっていてよかったとおもいました。

二年生になってからけがをしてしまったともだちをほけんしつまでつれて行ったことがあります。「ありがとう。」といわれたときにとてもうれしかったです。ともだちにかんしゃされてよかったとおもいました。

これからもこまっている人がいたらたすけたいし、わたしもたすけられることがあるので、「ありがとう。」とかんしゃのきもちをつたえてたすけあっていきたいとおもいました。

講評

登校の見守りをしてくれる町内会の人や学校で転んで怪我をしたときに保健室に連れて行ってくれた友達とのふれあいが書かれています。優しくしてもらったことで、自分も友達に優しく接することができたのですね。これからも、困っている人を助けたいという気持ちもしっかり述べられています。

優秀賞

ずっといっしょにいようね

南小学校　二年　髙村　夏羽

わたしにはお姉ちゃんが二人います。一番上のお姉ちゃんは六年生。ピアノがじょうずで、えいごもとくいですごいです。二番目のお姉ちゃんは五年生。歌や絵がじょうずで、すごいです。二人のお姉ちゃんは、いつもいっしょにあそんでくれます。

でも、なかよくあそんでいてもケンカをします。ときどき言いあらそいをして、お母さんからなかよくするように言われても、わたしはおこっています。

「だって、お姉ちゃんがわるいから。わたしはわるくないもん。」

それは、とつぜんおとずれました。一番上のお姉ちゃんは高知県の土佐町へ。二番目のお姉ちゃんはアドベンチャーキャンプへ。それぞれ同じ日に行ってしまったのです。わたしは、きゅうに一人ぼっちになりました。

「行ってらっしゃい。気をつけてかえってきてね。」

元気に見おくったあと、車にのったらお姉ちゃんたちがいません。広い車の中は、へんなかんじです。家についても声がしません。いつもならにぎやかな家なのに。

夜になりました。お母さんが、わたしのすきなからあげを作ってくれても、おふろできれいにしてくれても、なにかへんです。ひとりじめをしてみるテレビも、つまらない。その日は、いつもより早くふとんにもぐりこんでねました。

いつもいっしょにいたから、いなくなるとさみしいです。元気がでません。

「お姉ちゃん早くかえってこないかな。」

長い長い一人ぼっちがおわる日。ウキウキして、じっとしていられません。お姉ちゃんにまけたくないし、これからもケンカをすると思うけど、

わたしもやさしくするよ。だから、ずっといっしょにいようね。

「お姉ちゃん、おかえりなさい。」

講評

仲良しだけどケンカをしてしまう二人のお姉さんと作者。そのお姉さんが出かけて一人になったことから、お姉さんたちの存在の大きさに気付いた様子が書かれています。ケンカはするけど、お姉さんたちのことが大好きなことが伝わってくる温かさが伝わる作文です。

優良賞

たすけあい

南小学校　二年　大村（おおむら）美結（みい）

ある日のぜん校しゅう会のことです。校長先生からのお話で、南小学校の生とがおばあさんをたすけたことを聞きました。

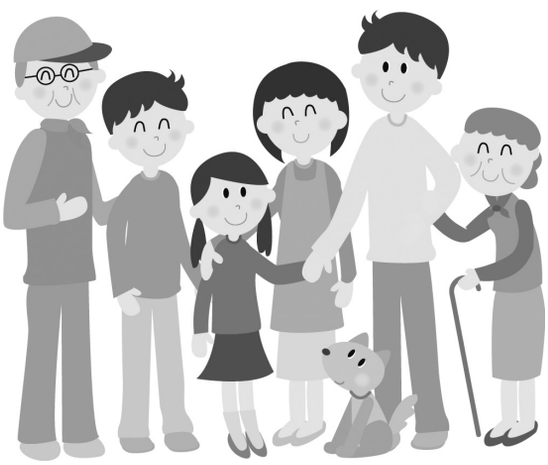
この生とは、学校からかえっているときにぐあいがわるくなって、たおれていたおばあさんを見て、ちかくのいえの人に、たすけをもとめたそうです。その人がきゅうきゅう車をよんでくれて、おばあさんはぶじにたすかったそうです。

それを聞いて、わたしは「すごいな。かっこいいな」と思いました。そして、おばあさんもたすかってほんとによかったと思いまし

た。その子は、ゆうきがあってすごいやさしい子だなあと思いました。わたしだったら、「どうしよう。どうすればいいの？」とまよってしまうかもしれません。でもその子は、すぐにこうどうをして、そのおばあさんのことをたすけれたのがすごいと思いました。

わたしもその子みたいになりたいです。こまっている人がいたらすぐこうどうしてたすけてあげられるようになりたいです。

すごくたすけあいがだいじだとわかりました。



小学校高学年の部

最優秀賞

かけがえのない〝ふれあい〟

北園小学校　六年　田中龍翔

おばあちゃん。ぼくの曾おばあちゃん。「だんだん、忘れんぼになってきちゃったわあ…。」と、少し困ったように笑った優しい顔。

赤ちゃんの頃はおしゃべりのかわりにたくさん抱っこしてくれて、たくさんふれあったね。でも、ぼくが成長するにつれ、抱っこはなくなって、そのかわりに会話がたくさん増えたよね。同じことをくり返す会話も、ぼくはちっとも大変じゃなかったよ。だってぼくが赤ちゃんの頃は、おばあちゃんがどんなに大変でも、くり返しくり返し、たくさん抱っこしてもらったんだもの。

だけどさびしかったのは、悲しかったのは、くり返すおしゃべりの間にも、どんどんと、おばあちゃんの記憶の中から、ぼくがかすんでいっている気がしたこと。どんなにたくさんおしゃべりをしても、どこか遠くに行ってしまうと感じて、あの日、ぼくの耳から一瞬、夏の音が消えた気がした。

おばあちゃんは眠っていることが増えてきて、ぼくは、本当に寝ているだけなのか、そうじゃないのか怖くて、〝眠っているのをじゃましたくないから〟と理由をつけて、おばあちゃんの家に行くのをへらしていった。

そうしているうちに、おばあちゃんの忘れんぼはさらにひどくなり、老人施設に入所することになった。ぼくも家族も、一人ぐらしをしていたおばあちゃんを心配していたから、とても安心して、ほっとして送り出した。

けれども、それまで一人で好きなように、自由に暮らしてきたおばあちゃんは、たくさん眠ることで体力を回復させていたらしい。規則正しい生活になったことで、これまでのすいみん時間が減り、さらにリハビリなどで体力を使うため、逆にどんどん衰弱してしまって、久しぶりに会いに行った時には、施設のベッドから起き上がれないほどまで弱ってしまっていた。

「あら、来てくれたの？」

そう言ってほほえんだ声も笑顔も、とても弱々しく、もともと小さな体のおばあちゃんが、ますます小さくなって見えた。

ぼくは精一杯、明るく声をかけて、大きくなったよ。今、勉強がんばってるよ。など、同じ会話をくり返した。

それから間もなく、おばあちゃんは天国へ旅立った。悲しさよりも、むなしいような気持ちの方が大きくて、「ああ、これが〝心にぽっかり穴があく〟ということなのか…」と実感した。

もう、どんなに望んでも、クリスマスにお願いしても、おばあちゃんに会うことも、優しい声を聞くこともできない。赤ちゃんの頃のようにとはいかなくても、もっともっと、ふれあう時間を持てば良かったのに…。

今、大切な家族や、大事な人にまだ会うことのできる人は、絶対にたくさん会って、笑って、顔を目に焼きつけて、声をしっかり耳に染み込ませておいてほしいです。そしてできるなら、たくさんふれあって、ぬくもりを覚えておいてください。

「ふれあい」は〝生きている人としかできない、かけがえのないもの〟だからです。

講評

曽祖母との様々なふれあいと、その時の作者の気持ちが豊かに表現されています。さらに、曽祖母とのお別れを通して、ふれあいとは何かという事について考えています。作者の温かい気持ちが伝わる作文でした。家族や友達、たくさんの人とのふれあいをこれからも大切にして過ごしてくださいね。

優秀賞

「当たり前」に気付いてもてた思い

西小学校　六年　音道（おとみち）　岳（がく）

ぼくのお母さんは、一昨年まで、今の仕事とはちがう仕事をしていました。

前の仕事は保育士で、ぼくの姉が小さいころから、とても長い間続けてきました。しかし、保育士の仕事は、とてもハードで、お母さんの体はぼろぼろになってきて、ついに仕事を変えることになりました。仕事をやめてから次の仕事につくまでの期間は、お母さんとの時間が増え、お出かけをしたり、学校での出来事などをたくさ

ん話をすることが多くなり、すごくうれしかったです。その期間の中でも、お母さんはたくさん勉強をして、次の仕事につく準備をしていました。

新しい仕事では、これまでとはちがう分野ということもあり、覚えるものが多く、毎日が本当に大変そうでした。そこで、お母さんの負たんを減らすために、お手伝いに力を入れることにしました。普段お母さんがしてくれていることに目を向けてみると、朝食、夕食、休日には昼食も作ってくれていることに、改めて感心しました。なぜなら、ご飯を作るには、毎日のメニューを考えなければいけないし、家族のために栄養のバランスも考えなければいけません。これらを毎日、当たり前のようにするというのは、簡単なようで、とてもむずかしくて大変だと思います。改めて、お母さんのすごさや家族を思う気持ちを知ることができました。毎日、当たり前のように続けてくれている家事は、家族全員に向けた〝思いやり〟の気持ちにあふれているんだなと、感じました。よく、『母は偉大だ』とか、『お母さんはすごい』という言葉を耳にしますが、これらの言葉は、お母さんが家族へ向ける思いやりの気持ちがあふれているからこその言葉だと、しみじみ思いました。

そんなお母さんのために、できるだけ毎日夕ご飯を作ることにしています。ぼくが夕ご飯を作ると、お母さんがつくるのは、平日は朝食のみ、休日は朝食と昼食を作れば良いことになります。お母さんの家事を減らし、その不足分をぼくが代わりにおぎなうことで、お母さんが少しでも楽になり、さらには、ぼくからの毎日の感謝の気持ちとして、恩返しをしていけたらと考えました。

実際、お母さんの家事をぼくが代わりにおぎなうと、とても大変なことばかりでした。まず、冷蔵庫にある食材からどんな料理を作れるかを考えたり、次に、どんな料理を何品作れば、栄養が整っているかを考えたりしました。いざ、作ってみると、ちょっとしたことであっという間にこげてしまったり、形がおかしくなってしまったりしました。お母さんは、焼いている間に他の食材を切ったり、混ぜ合わせたりしているので、やっぱりすごいなと改めて思いました。

ようやく出来上がったものを食卓に出すと、家族が「すごい!!」や「美味しそう。」と言ってくれました。食べた後には、お母さんが、

「作ってくれてありがとう。」

と、うれしそうに言ってくれました。人を喜ばせることがこんなにうれしいんだ、と気付くことができました。

ぼくがお母さんの忙しさや大変さに気付き、普段の家事の代わりをすることでお母さんの笑顔を増やすことができました。ぼくにとってはまだ慣れないことだらけで、とても大変だったけれど、お母さんや家族の笑顔を見ることができて、大変だったことをわすれるくらいうれしかったです。

自分の身の周りの人を思いやる気持ちをもつことで、人を喜ばせるきっかけにつながると思います。思いやりの気持ちをたくさんも

ち、そのきっかけをたくさん作り、行動し、人々が幸せに過ごしていけるような社会になるといいなと思いました。

講評

夕食を作る経験を通して、お母さんの家族への思いやお母さんの偉大さに気付くことができたことが書かれています。また、作者が作った夕食を家族が喜んでくれたことがやりがいになっていることに気付きました。「思いやりの気持ちをたくさん持ち、人々が幸せに過ごしていけるような社会に」というメッセージも伝わってきました。

優秀賞

私を変えた夏の思い出

南小学校　六年　髙村陽葵（たかむらひまり）

私は八月九日から三泊四日で、土佐町親善交流事業に参加しました。きっかけは、両親の後押しもあり、ホームステイをして土佐町の生活の様子を知りたいと思ったからです。

私の性格は、はずかしがりやで人と話す時に、緊張して言葉が出なくなることがあります。人とコミュニケーションをとるのが少し苦手で、ドキドキしてしまいます。そんな消極的な自分を変えたくて、応募しました。

初めはとても緊張しました。ホームステイ先の家族が元気に明るく迎えてくれたので、ホッとしました。同じ年齢の「つむぎさん」と仲良くなり、少しずつ私の緊張もほぐれていきました。

二日目の夕方、棚田を散歩しました。初めて見た棚田は階段のようになっていて、青々とした田んぼとオレンジジュースのような、濃い夕焼け空は、今まで見たことのないとても美しい景色でした。小川のせせらぎがバックミュージックとなり、リラックスすることができました。

三日目は、吉野川でラフティングをしました。初めて着たウェットスーツは、水着と違って不思議な感じでした。川の中には鮎や小魚がいて、キラキラ光るきれな水に感動しました。そして、いよいよ私が岩の上から飛びこむ出番になりました。怖くて足がブルブル震えて、心臓もバクバクしました。つむぎさんの家族が

「がんばれ。」

「できるよ。」

と声をかけてくれたので、勇気を出して飛ぶことができました。緊張がとけたからか、そのあと川の浅瀬で食べたお弁当は、最高でした。「波」のことを土佐弁で「瀬（せ）」と言うのだと教えてくれました。

あっという間に最終日。お世話になったつむぎさん家族とお別れするのが、とてもさみしかったです。今度は冬に、つむぎさんが私の家にホームステイします。むかえるのが、とても楽しみです。十和田の良いところを、たくさん伝えられたらいいなと思います。

最後に、土佐町親善交流事業を通して、土佐町の自然の豊かさと人のやさしさを感じることができました。また、つむぎさん家族のあたたかさにふれて、私の目標としていた「消極的な自分を変える」ということが実現できたように思います。

自分を前向きにしてくれた、夏休みの最高の思い出…。いつもの見慣れた景色が、明るくキラキラ見えます。「今なら空も飛べるかも…」と思うくらい、私の心ははずんでいるのです。いつまでも忘れない大切な宝物になりました。

講評

土佐町親善交流事業で出会ったホームステイ先の家族とのふれあい、土佐町の自然とのふれあいによって、消極的な作者が一歩一歩成長していく様子が書かれています。今度つむぎさんが十和田に来た時には、十和田の良いところを伝えたり、陽葵さんがつむぎさんにパワーを与えてあげてくださいね。

優良賞

みんなでたすけあい

西小学校　六年　志田翔子

わたしは、小学校六年生の修学旅行で、こんな体験をしました。それは二日目の自主研修で路面電車に乗った時です。友達が、お年寄りに席をゆずっているのを見ました。わたしは、自分から席をゆずるということをあまり考えていなかったけれど、友達の行動を見て、友達は、周りを見ていると思いました。その後も、たくさんの人が入ってきました。その時わたしの前に一人のおばあさんが立っていました。わたしは、そのおばあさんに席をゆずることができました。そのおばあさんは、

「ありがとう。」

と言って席にすわりました。ゆずった時おばあさんは、にっこりしていました。わたしも人を助けることができたので、わたしもうれしかったです。その後も何回か席をゆずることができました。これからは、友達が困っている時や、おじいさん、おばあさんが困っている時、お母さんや家族が困っている時などに助けてあげたいです。もし知らない人でも助けていきたいです。

他に、学校でも「たすけあい」があります。それは、今年六年生になったわたしは、一年生のお世話をすることになりました。一年生のお世話では、読み聞かせをしてあげたり、学校のルールを教えたり、給食の後かたづけの仕方を教えたりしました。学校生活のことがまだよく分からない一年生にいろいろ教えることは、大変だっ

たけれど一年生と仲よくできました。また、一年生が笑顔になってくれたので、大変だったけれどよい経験になったのでよかったです。わたしも一年生の時、六年生のお兄さんやお姉さんに助けられたので、一年生のお世話をして助けあいの大切さを学びました。

今回わたしは、たすけあいについて考えた時に、身近な人を助けるのだけではなく、コンビニやスーパーなどに置いてある募金箱に募金することも助けあいだと思いました。このように、身近な人を助けるのではなく、知らない人でも助けてあげたいです。この助けあいはしょう来にも役立つと思うので、みんなといっしょに助けあっていきたいです。

これからも、みんなで協力して楽しい生活にしていきたいと思います。

優良賞

心から住みやすいと思えるまちへ

西小学校　六年　佐々木（ささき）　麻央（まお）

私は先日、はじめて美術館へ行きました。この美術館は、おどろくような作品が、プラスチックやガラスなどの現代のものでつくられています。また、いろいろな見たことのない美しい作品がたくさんあります。

けれども私は、美術作品そのものよりも、建物の構造で気になったことがあります。それは、体の不自由な方やお年寄りの方、小さな子どもが十分に楽しめるのかという事です。

美術館は、だいたい一つの部屋に大きな一つの作品があるのですが、入り口や通路がせまかったりして、体の不自由な人にとっては、かなり不便ではないだろうか…と思いました。他にも小さな子どもやお年寄りの方、体が不自由な方は、イスの上にのぼって作品を楽しむものや、かべにつながれた球体をきゃたつでのぼっていき、中の景色をのぞきこむ作品などを体験して楽しむことがむずかしいのではないだろうかと思いました。また、小さな部屋の中の展示では、見学したあとに通路をUターンしなくてはいけないところは、車いすの方にとってはすごく不便ではないのかな…と思いました。部屋は一見広く見えるけれど、作品をこわさないようにロープがはられているので、とてもせまくなっています。車いすの方などが通れるように、通路を広くすることが必要だと感じました。

今のままだと、美術館などの多くの施設は、体が不自由な人も含め、みんながみんな楽しめるつくりにはなっていないと思います。

今の時代は、インターネットで調べて作品を見ることができます。しかし、インターネットで見るよりも、実際に体験したり、その場のふんいきを少しでも共有することが大切だと思うのです。だから、空いているかべに体験すると見えるはずの作品の写真をかざるなど、その場で体験した気持ちになれるような工夫をすると、体が不自由な人たちや小さな子ども、お年寄りの人たちも楽しんで、わかちあえるのではないかと考えました。

建物や作品は、今から建て直したり、つくり直したりすることはとてもむずかしいです。

体が不自由な人たちのために私たちができることは、「車いすの方やお年寄りの方など体が不自由な方が来たときに道をあける」ことです。しかし車いすの方やお年寄りの方から考えると、だれにもぶつからずに作品を見ることができるかもしれないけれど、道をあけてもらって申しわけない気持ちにさせてしまい、思うぞんぶんたんのうできないかもしれません、だから、一方通行などにするとよいのではないかと考えました。また、今ある建物や作品に、「つくりたす」とよいのではないかと考えました。

私たちのくらしには、体が不自由な方やお年寄りの方、小さな子どもなどいろいろな人がいます。たくさんの人が集まる美術館などの公共しせつだからこそ、いろいろな人に安心して心から楽しく利用してもらいたいです。そして、いろいろな人にやさしい・にぎわいのあるまちになってほしいです。そのために、いろいろな人たちの立場にたって考えて、助け合いながら生活することがとても大切だと思います。これから生活していくときは、どのようにするとだれでも楽しめる明るい十和田市になるかを考えたいです。そして、自分以外の人を思いやり、助け合って過ごす環境を私たちで作ろうと思いました。

佳作

やさしいおばあちゃん

西小学校　六年　小笠原（おがさわら）　結（ゆい）　翔（と）

「よく来たなぁ。」

といつもむかえてくれるおばあちゃん。今は老人ホームにいます。おばあちゃんは一人暮らしでした。足が悪くて思うように歩けませんでしたが、リハビリをがんばっていました。でも体調をくずして老人ホームに入ることになりました。

お正月やお盆、お彼岸など家族で集まる時におばあちゃんに会えました。会うと、「また大きくなったなあ。」と成長した僕をみてくれました。お母さんに僕が赤ちゃんの頃のことを聞くと、会った時はたくさん抱っこしてくれたそうです。少し大きくなって保育園の頃は虫が好きだったので、セミやクワガタムシやカマキリやバッタなどを捕まえて待っていてくれました。とてもうれしかったです。そしておばあちゃんの家でとんぼを虫とりアミでつかまえる遊びがとても楽しかったです。

お盆のお墓参りでは、足が悪いおばあちゃんの手をひくのが僕の役目でした。この時

「ありがとう。」

「助かる助かる。」

「ゆいとのおかげで墓参りできた。」

と言ってくれました。僕もおばあちゃんの役に立つことができて良かったです。あったかい気持ちになりました。

今年からおばあちゃんの家に行っても会うことはできません。とてもさみしく思います。老人ホームにいるおばあちゃんにも簡単に会うこともできません。新型コロナのえいきょうで直接面会することがむずかしく、オンラインで会うことができても直接会うことはなかなかできないそうです。しかも、オンラインでも日にちや時間をみんなに合わせることが大変なので僕はまだ会えていません。今年のお盆は、おばあちゃんは家にいなかったけど老人ホームでは元気にしていると話が聞けたので良かったです。いつかおばあちゃんと会える日を楽しみにまっていたいと思います。そして、その日に笑顔で会えるように元気にすごしたいと思います。

往作

ミルモが私に教えてくれたこと

西小学校　六年　佐々木（ささき）　利望（りの）

私が生まれたときから、チワワの「ミルモ」という犬がいました。おく病で、名前を呼んでも来ないミルモ。でも、散歩の時は、喜び横になると来るときもありました。「ミルモ！」と呼ぶとこちらを見て、歯を出すすがたにみんないやされました。

そんなミルモでしたが、私が成長していく中、目が白くなったり、一日中せきがでるようになりました。

病院につれていくと色々な病気が発かくしました。

薬を飲んでいたけどある日病院に行くと、「いつ死んでもおかしくない。」と言われていましたがその次の日の夕方なくなりました。私は、その日宿泊学習でした。

なくなったことをお母さんから聞き、悲しいのとショックな気持ちになり、色々と元気なミルモのすがたを思い出し泣きました。

すぐに会いに行きました。いつもと変わらずねむっているだけ。そう信じたかったけど、体はかたくて冷たかったです。最後はずっとだきながら今までの気持ちを心の中でミルモにたくさん伝えました。ミルモにとどいたかな。

あれからもう一年がたとうとしています。今天国でミルモは何をしているのかな、他の犬と仲良くできているのかな。ミルモ、いつもいやしてくれてありがとう、わがまま聞いてくれてありがとう。天国でずっと私を見守ってね。いつもいることが当たり前でいずれは死がくること、命の大切さ、ミルモが全て私に教えてくれました。

中学校の部

最優秀賞

今の私ができること

十和田中学校　二年　木村真理

「人の役に立ちたい。」

そんな言葉の中には、少しの勇気でたくさんのことが学べるボランティア活動がある。私は、この前「人の役に立ちたい」という思いでゴミ拾いのボランティア活動に参加した。

「今年も十和田市の花火きれいだね！」

雨の影響で一日遅れの開催だったが、大きな美しい花火が十和田市の夜を明るく照らした。花火が終わり帰るとき、歩行者天国の前に立って誘導している人とすれちがった。

「そっか、こんなきれいな花火あの人たちは見ていないんだ。」

そういえば、花火を見ることができたのは、花火師や協賛企業などの人たちのおかげなんだ。毎年、なにげなく見ていた自分が恥ずかしくなった。

家に帰った後、私は、十和田市花火大会の協賛企業を調べた。見ると数えきれないほどの企業グループの名前が書かれていた。

「こんなに協力して、十和田市の花火大会が成り立っているんだ。」

すると、その上に清掃ボランティア募集と書かれているのが目にとまった。

「これだ。」

私はまるでくぎ付けになるようにじっと見ていた。これがボランティアに参加しようと思ったきかっけだ。

朝、五時四十分あたりにお父さんと家を出た。朝六時にもかかわらず、二十人から二十五人あたりの人が集合場所の国旗掲揚台前に集まっていた。小さい子どもから大人まで。

六時になり、一斉にごみ拾いが始まった。緑地公園や陸上競技場、官庁街通りなどが掃除をする場所だ。下の方を見るとすでに、花火の破片が所々に落ちていた。拾い集めてから、花火を見た観客席の方に向かうとそこには、屋台で買う時に出る袋や竹ぐしなどが、そのまま捨てられていた。こんなことをする人が身近にもいることを改めて知らされた。それでも、ボランティアの人たちは、何も言わずに時間を割いて他の人が出したゴミや花火の破片をもくもくと拾い集めていた。その背中を見て、本当にかっこいいと感じた。負けずに私もごみを拾い集めた。

一時間は、あっというまに過ぎていった。袋はずっしりと重くなっていた。この分、きれいにできたとうれしく思い少しは役に立てたような気がした。終わった後に、

「参加してくれてありがとうございます。おつかれさまでした。」

と言われジュースとパンをもらった。私はほっこり心が温かくなった。車に向かうとまだごみ拾いをしている人がいた。私もそんな人になりたい、と感じた。そして毎年行っていると知って十和田市がきれいなのは、自分のゴミを持って帰る人たちとボランティアの人たちのおかげだと思った。

このボランティアを通して町のしくみを知り協力の大切さを学んだ。ささいなことだけどこの大好きな十和田市が豊かで、きれいが

続くようにボランティア活動を通して取り組んでいこうと思う。まずは、自分から積極的に行動することが、誰かの役に立てるスタートだと感じた。

講評

今年も盛況のうちに終了した十和田市夏まつり花火大会。その翌日に行われる清掃ボランティアに、まるで吸い込まれるかのように参加することを決意します。黙々とごみを拾い続ける人たちの背中を見て、「本当にかっこいい」と感じた木村さんの、誰かの役に立つことへの喜びが静かに伝わってきます。

優秀賞

一人じゃないから

第一中学校　二年　小笠原（おがさわら）　瑠（る）　稀（きあ）

私が、一人じゃないからというタイトルにした理由は私が小学校高学年のころにある決心をしたからです。

夏休みのころに母がある曲を聴かせてくれました。その曲はＡＩさんの「Ｓｔｏｒｙ」です。私は初めてこの曲を聴いていたら自然と涙が頬をつたっていました。歌詞の中にある「一人じゃないから、私が君を守るから強くなれるもうなにも怖くないよ」という歌詞が私の心に響いたからだと私は感じました。

私は、小学生のころにちょっとした嫌がらせを下級生から受けていました。靴の中に、画びょうが入っていたり、「瑠稀さんの目って寄り目でなんか妖怪みたい。」と笑いながら言われたりすることがあり、初めは、おもしろ半分で言ってるんだし、相手の気持ちをその子は考えられないだけだと思ったりして、自分を励ましたり、親と相談したりするなどして自分の気持ちを安定させていましたが、だんだん学校が嫌になってしまう時もあって精神的につらかった時にあの曲を聴き、心が救われたように感じました。歌でも、言葉でも人を助けられるのだと思い、「一人じゃないから」という一言でも人の心を救えると知り、私もそれから前向きに学校に行けるようになり、嫌がらせやいじめに対する気持ちも変わり、少しくらいのことなら相手の心が弱いだけと思うようになれました。自分の心も前より強くなれたと思います。

私は今、中学校で生徒会に入り活動をしています。私の目標は、みんなが笑顔で楽しくすごせる学校にすることです。そのために私は、誰かが困っていたら助けたり、大変そうだったら手伝うなどの動作があたりまえに行えるように心がけるなど自分にできることや、どんなに小さなことでもやってみると生活が変わることもあるということを忘れずに毎日学校生活を楽しんで過ごしています。

そして、誰一人とり残さない生活も目標としています。私の決心は、私みたいな嫌がらせを受けている子がいたら絶対に一人にはせずに助ける。これを忘れずに私は過ごしています。

もし、困っていたりいじめや嫌がらせを受けて悩んでいる人がいたら、この曲を聴いて心の支えにしてほしい。つらい時や苦しい時に「一人じゃないから」という一言を思い出してほしい。そして忘れないでいてほしい、あなたは一人じゃないということを。

この曲を聴いた人が、少しでも前向きな気持ちになれたら私も、とてもうれしいです。

そして、私が学校などでのいじめをゼロにしていくために頑張っていることがもう一つあります。

それは、誰にでも笑顔で接したり、一日に一回は必ずクラスメイトや下級生に声をかけることです。私が毎日、みんなに声がけをしている理由は、コミュニケーションをとっていく間で、私と話しやすくなってもらい、学校での話などをしていくなかで、生活していて困っていることや悩みごとは無いかなど、誰にも相談しにくかったことをコミュニケーションをとっていたことによって少しは話してくれる人もいると思って、毎日努力しています。

誰にも話せない悩みや相談したいことが言えずに自分の心を閉ざしてしまう人もいるけれど、いっしょに会話をしたりして、もう一度心を開いてくれる人もいます。そんな人を助けられる人に私は、なりたいと思いました。

講評

タイトルの「一人じゃないから」は、ある曲の歌詞の一部。その言葉をパワーワードに、困難を乗り越え、今では生徒会役員として、学校生活をよりよくしようと思うまでに……。その小笠原さんのストレートな気持ちは、やがて学校中に広がり、きっと素敵な学校文化を築く礎になるものと思います。

佳作

気持ちと勇気

甲東中学校　二年　洞内（ほらない）　優李（ゆうり）

二〇二四年が始まり、わくわく楽しみに満ちあふれていた。しかし、そのわくわくは一日ももたなかった。

一月一日。私は家族で東京旅行をしていた。一日は、朝から夢の国で満喫していた。十六時十分。とあるショップを出た。その瞬間、「地震です。地震です。ブワッ、ブワッ、ブワッ」。大勢のスマホが一斉に鳴った。大きな警報音や、ざわつきの中とある声に耳を傾けた。

「みなさん。姿勢を低くして、落ちついて頭を守ってください。」

それは、キャストさんの声だった。私たちゲストは、キャストさんの声のおかげで揺れがおさまるまでの間安全に過ごせた。この言動は、だれもが咄嗟にできるものではない。ゲストを不安にさせない気持ちがあるからこその勇気ある言動だと思う。しばらくして、スマホを見ると震源地は石川県。津波警報も出ているとのことだ。

「ヤバいよ。大丈夫かな…。」

不安な声がたくさんあった。私たちも不安なまま、過ごしていた。

「これからどうなるんだ?」という気持ちがずっと頭の中にあった。

帰り道の夜の車でテレビをつけると緊急津波注意報ばかりだった。「新年から大変だ。能登の人は大丈夫なのか。心配。」石川方面には知り合いはいないが他人事だとは全く思えなかった。

一月八日。県が派遣するボランティア活動が始まった。それから、炊き出しへと県外から来たボランティアの方はたくさんいた。ボランティア活動に積極的に参加できる方は、「被災された方を一刻でも早く元の生活に戻してあげたい」などの気持ちがあるからこその勇気ある行動だと思った。

さらに、「気持ちと勇気」を大切にしていかなければならない場面は、たくさんあると考えた。「たすけあい」の面だけで考えると一つ目は、災害の面。二つ目は、学校の面。三つ目は、御近所さんの面、などです。災害の面では、ボランティア活動に参加する方の中には、過去に自分が被災し、助けていただいて温かい気持ちになった人もいないとは言い切れない。少し場面が変わるが学校の面では、相手の「気持ち」を考えるという場面が多い。いじめられている人がいるとしよう。いじめられている人を助けるためには、「気持ちと勇気」が必要だと思う。声を掛けようとしても助けようという気持ちやいじめをしている人へ注意を伝えるのも十分勇気がいることだ。御近所さん同士の場面も少なくはない。帰る途中話したことがなくても「おかえり。」と声を掛けてくださる。こういうのは恥ずかしがっているところではない。普段の感謝の「気持ち」やあいさつを返す「勇気」も必要だ。たった一言の積み重ねでも、今後も大切にして、御近所さん同士の関係を築いていきたいと思う。

これらのことから、過ごしていく中で「気持ちと勇気」というものを大切にしていきたい。このくらいと思うこともあるかもしれないが、一人の勇気ある行動で相手が温かい気持ちになるかもしれないと思うと、考え深い。だから、私はこれから「気持ちと勇気」を頭に入れて、大人になってもたくさんの人と助け合って生活していきたい。

佳作

たすけあいの心

第一中学校　三年　長澤（ながさわ）美優（みゆ）

私は、生きていくには、たすけあいが必要だと思います。家族、友人、学校の先生など私達は、日々たくさんの人と支えあい、たすけあいながら生活しています。周囲の人がいなければ今のような楽しく、充実した生活ができないと思います。たすけあいとは、互いに信頼し、思いやりをもって接し、困っている人がいたら手を差し伸べることだと思います。

私がすごいなと思ったたすけあいは、災害があったときにたくさんの人が募金したり、ボランティアとして被災地に行ったりしていたことです。東日本大震災や、能登半島地震のときに、遠くからボランティアで来ているというのをテレビやネットで見たことがあります。被災地に、物資を送っている人がたくさんいて、すごいなと思い私も募金して助けたいなと思いました。台風が発生したときにも、避難所では、支えあい、たすけあいながら困難をのりこえています。私は、東日本大震災のときはまだ小さくて大きい災害を覚えていないけど、お母さんが私のことを守ってくれたんだなと思いま

した。大変なときに協力しているのがすごいなと思いました。

また、日常生活の中でもたすけあいはたくさんあります。

勉強を友達と教えあったり、部活で教えあったりしていることです。勉強では、友達に分からない問題を聞いたときに優しく教えてくれたことがうれしかったです。私が勉強を教えたときに友達に「ありがとう」と言われたときに教えて良かったなと思いました。部活では、先輩が後輩に教えるなどしてたすけあっています。私が部活でまちがったときに先輩が優しく「大丈夫だよ」と言ってくれてとてもうれしかったです。勉強や部活で教えあうことで友情も深められると思います。

そして私が一番助けられているのは、家族です。お母さんは、仕事をして疲れていても毎日おいしいご飯を作ってくれたり、そうじをしたり家族のためにたくさんのことを頑張ってくれています。私がおちこんでいるときも話を聞いてははげましてくれて元気づけてくれます。そして、部活が終わって家に帰ってきたときに家族が「おかえり」と言ってくれると安心します。いつも家族に感謝を伝えられていないので素直に「ありがとう」と言えるようにしたいです。反こうしてばかりなので、反こうしないでお母さんの手伝いをして少しでもお母さんが楽できるように頑張りたいです。いつも家族に助けられているので家族を信頼し、大事にしたいです。

私は、困っている人がいても自分から声をかけれないことがありました。でも自分が困っているときに友達に声をかけられてたすけあいの大切さが分かりました。そして「ありがとう」という言葉を言われたときに、困っている人に声をかけて良かったなと思いました。「ありがとう」という言葉は、言った人も言われた人もうれしくなるいい言葉だと思いました。たすけあいは生きていくために大切にしていかなければならないものだと思います。たすけあいは、たくさんの人が温かい気持ちになると思います。

私は、「ありがとう」と言われたりみんなが笑顔になったりするのがうれしいので、将来は看護師になってひとりでも多くの人を助けたいです。困っている人がいたら声をかけたりたすけたりして、相手の気持ちを考えて行動したいです。

佳作

思いやりとは何か

第一中学校　二年　小川舜太

僕が、ゲームセンターのゲームで遊んでいた時に、そのゲームで勝ってはしゃいでいたら、ゲームで勝ってもらえたコインに手が当たってコインが床に全て落ちてしまったことがありました。そのときに、コインを一緒に拾ってくれたおじいさんがいました。そのおじいさんは何も言わずに一生懸命コインを拾い続けてくれました。とても優しいおじいさんでした。コインを拾い終わった後に、僕は「ありがとうございました。」と言いました。そしたらおじいさんが

「大したことはないですよ。」
と言ってくれました。とても嬉しかったです。おじいさんへの感謝の気持ちでいっぱいでした。
　このようなことがあったので、僕は「次は僕が人が喜ぶことをしよう」と思い、次のことをしました。
　僕が、スーパーで買い物をしていて、買い物の会計をしていたときのことです。同じスーパーで買い物をしていたおばあさんは、もう買い物も会計も終えて、買った商品をエコバッグにつめていました。おばあさんが商品をエコバッグにつめ終わったと同時に僕たちは会計が終わって商品をエコバッグにつめるところでした。そのときにおばあさんは、すしをエコバッグにつめるのを忘れて帰ろうとしていました。そのとき僕は、そのことに気付いて、ふとゲームセンターでコインを拾ってくれたおじいさんを思い出しました。そのことを思い出して僕は、おばあさんにすしをわたしていました。そのときのおばあさんは、一瞬驚いた後にニコニコ笑って
「ありがとうねぇ。」
と言ってくれました。その感謝の言葉を聞いて僕は、とても嬉しくなりました。そして僕は気が付きました。「思いやりをしても、思いやりをされても、とても嬉しくなるのだなぁ」と気付きました。あと、おじいさんも僕に親切をしてくれたときに、今の僕と同じ気持ちなのかなと思うと、なんだかまだまだ人を助けたり、人を喜ばせたいなと思いました。
　そして僕は、一人一人がそれぞれ思いやりの心を持ったらどうなるのかなと考えてみました。
　例えば、人と人の肩がぶつかってけんかしたときに、「この人は急いでいたのかな」とかお互いに謝ったりとかをすれば、けんかにならずに、ただのささいな出来事にすますことができたりして、どんどん平和な世界になっていくのかなと思います。
　あと、あまりないけれどコンビニでラスト一個の商品に二人同時に手を伸ばしたときに、二人がゆずり合ったら、笑いが生まれるかもしれないし、「どっちも優しい人だ」と気が付いて友達になれるかもしれません。
　このように、お互いが思いやりの心を持ったら、小さなもめごとは起きないし、少し楽しかったり嬉しかったりする出来事に変わるかもしれません。
　だから、世界中の人たちが全員思いやりの心を持てば、平和で優しい世界になるんじゃないかなと思いました。
　一人一人の行動はとても小さなことだけれど、それがたくさん集まって大きな物になると思います。
　だから僕は、この経験をいつまでも忘れないで思いやりの心を持った優しい大人になりたいです。そして周りの人たちや世界中の人たちに、広がって平和な世界になってほしいです。

佳作

もう一度会って

第一中学校　二年　小澤結璃

おばあちゃんが死んだ。私はそれをきいた瞬間、頭が混乱し、声を出すことができなかった。

おばあちゃんは、山奥に住んでいて、とても優しくて、おもしろかった。

でも私は、おばあちゃんの葬式に行きたくなかった。おばあちゃんが死んだことを認めたくなかったからだ。でもやっぱり行くことになって、近づくにつれて、心が苦しくなった。

葬式が始まる前に、おばあちゃんの顔を見た。その時に、歯を出して、優しく笑うおばあちゃんの顔が浮かんできた。さすがにもう、がまんができなくなり、泣いてしまった。その後、おばあちゃんの口に口紅をぬってあげた。きれいなあわいピンク色だった。おばあちゃんにとても似合っていた。

葬式が始まってからの記おくはもう忘れてしまった。それに、葬式中、自分が何を考えていたのかも忘れた。でも、人生で初めての葬式だった。記おくはないが、多分、いろんなことをしたんだと思う。

そして、家に帰った。一日がとても長く感じた日だった。疲れたから、ねようと思ったが、すぐにはねれず、目をつぶりながら、おばあちゃんのことを考えた。小さい頃、いっしょに遊んだり、本を読んでもらったりと、いろんなことをしてもらい、感謝しても、感謝しきれないほどに、たくさんの思い出が浮かびあがってきた。この、たくさんの思い出はいつまでも忘れない。そう思い、私はねむりについた。

数日後、また家族みんなでおばあちゃんの家に行った。そこにはもう、おばあちゃんの楽しそうな姿は、どこにもなかった。もう一度、もう一度だけでもいいから、またおばあちゃんに会って、いっしょにお話したり、おばあちゃんの大好きなさし身を食べたりしたいな。そう思いながら、おばあちゃんの家をていねいにそうじした。

あっという間に、もう夕方になっていて、とてもきれいにかた付いていた。帰る時間になって、帰ろうとしたら、弟がおばあちゃんの犬と遊んでいた。私もいっしょに遊んだ。とても楽しい時間だった。

さすがにもう暗くなってきたので、帰ることにした。最後に私は、おばあちゃんの家を見た。ボロくて、少しきたなかったけど、たくさんの思い出がつまっていて、とても温かく感じた。そこで私は決めた。下ばかり向いて泣いていないで、前を向いて歩いていこう。そして、たくさんの人とふれあい、ともにあゆんでいこう、と。

それから、今、私は、い

ろいろな個性がある、たくさんの人と友達になった。その友達のおかげで、自分にも個性があるんだと勇気付けられた。とてもうれしかった。それに、自分から積極的に意見や案を言えるようになった。おばあちゃんが昔、言ってた「人とのふれあいをたくさんして、たくさん友達をつくるんだよ」という言葉は今でもずっとおぼえてる。

私は、勉強が苦手だ。特に、英語が一番苦手な教科だ。だからこそ、アメリカ人やいろんな国の人、そういう人達とたくさん話して、英語を好きになりたいし、英語だけにかぎらず、たくさんの人とふれあい、仲よくして、いろいろな国の友達をたくさんつくりたい。

そして、今の友達とも、たくさん遊んで、もっと仲を深めていきたいと思う。

佳作

地域の人との関わり

第一中学校　一年　折田（おりた）　雫（しずく）

私は地域の人が関わることでたくさんの行事が成り立っていると思います。私がこのようなことを感じたことは主に三つあります。

一つ目は、花だん整備です。私は初めての花だん整備だったのであまりやり方が分かりませんでした。その時に手伝いにきてくださった地域のみなさんにやり方を教えてもらってとても感謝しています。また、八月にろまんパークに行ったら、私たちが植えた花が元気に咲いていました。元気に咲いているのも地域の方々が水やりなどをしてくださったおかげだと思います。私はこのような地域の方々の協力がなければ花だん整備は成功していなかったと思います。

二つ目は、救命講習です。三年に一回しかない救命講習では、最初にビデオで人工呼吸と胸骨圧迫とＡＥＤの使い方を学びました。その後に実際に消防署の方々が準備していただいたマネキンで人工呼吸と胸骨圧迫をやったり、ＡＥＤを使いました。実際に体験してみることで、人工呼吸の息の入れ方や胸骨圧迫の大変さ、ＡＥＤのすばやくやらないといけない大変さが分かりました。小学校の時にもこのような体験をしているのですが、人工呼吸はやっていなかったし、ＡＥＤも二人でやっていたので、少しレベルが上がったなと感じました。このように思えるのも実際に体験したからだと思います。これから実際にこのようなことはあるか分からないけど、今回学んだことは長く覚えておきたいです。

三つ目は、小学校の頃の運動会です。小学校の頃の運動会では、当日の会場作りの手伝いに来てくれる人や児童の写真を撮ってくれる人など運動会に協力してくれた地域の方々がたくさんいた事を覚えています。特に運動会の会場準備は、朝早くから学校に来て準備をしなければいけないので大変だけど、毎年地域の方が来てくれているということにとても感謝したいです。

四つ目は、小学五年生の時に田んぼを貸してくれた小笠原しげみさんのことです。私は五年生の時に夢田んぼという活動で、小笠原しげみさんの田んぼを借りて米を育てました。私たちは、田植えと稲刈りの作業を手作業でやりました。私たちも時々見に行ったりして、元気に育っているのが嬉しかったです。元気に育っていたのも、小笠原さんが水やりや除草剤をまいてくれたおかげだと思います。

また、稲刈りをした後の作業の機械も地域の人が貸してくれて、とても助かった事を覚えています。本当に感謝しています。

このように思い返してみると結構地域の人に協力してもらっていることが多いなと感じました。もちろんこの他にたくさんあるけれど、主にこの四つを紹介しました。小学校も中学校もすごく地域の人に関わっている活動がたくさんあることを知って、できるかは分からないけど、いつか恩返し的な事をできたらいいなと思っています。改めて地域の人がいないとできない活動がたくさんあるなと感じました。

これから、中学校生活で地域の人に感謝することがたくさんあると思います。その度に協力してくれることは決して当たり前ではないと思いながら、活動していきたいです。また、本当に地域の人は温かいなと感じました。こんなに協力してくれる地域の皆さんは、すごく温かい人なんだなとこの文章を書いているとき思いました。本当に地域の人に感謝しています。

高等学校の部

最優秀賞

一枚の写真

十和田工業高等学校　二年　高橋（たかはし）　真龍（しんりゅう）

夏休みに入り、母と二人で夕飯の買い物にスーパーに行った時の事だ。僕が大好物のマグロの刺身を見ていると、年配の夫婦がいた。手には、折りたたみのカードケース、右に、買う物を書いたリスト、そして左に、にっこり笑った赤ちゃんの写真が見えた。僕は思わず口元がゆるみ、ほんわかした温かい気持ちになった。僕に気付いたそのご夫婦は、

「かわいいでしょ？初孫なのよ。」

とにっこり声をかけてきた。僕は少し恥ずかしかったが、

「とてもかわいいですね。」

と勇気を出して応えた。

その後、家に帰り、僕はふと思ったことがあった。家のリビングには僕や妹の写真、幼い頃に描いた絵、そして賞状などが飾ってある。祖母の家も考えてみると、同じくリビングには僕や妹の赤ちゃんからの写真、祖母の誕生日に妹と仲良く描いた似顔絵、敬老の日に書いた、「いつまでも長生きしてね。」のメッセージ、僕と妹の写真付きカレンダーなどが飾ってある。さらには、母の妹のおばさんのスマートフォンの中には、同じく僕や妹の赤ちゃんからの写メが何百枚も入っていることに気付いた。たまに、おばさんは、この頃はこうだったああだったとうれしそうに写メを見かえしている。その時の僕は、こんなにも写真や絵が貼っているのにも気付かず、僕にはただの白い壁に思えていたのかもしれないと思った。

このスーパーでのご夫婦の一枚の写真で、今まで気付かなかったことに僕は気付けた。こんなにも僕や妹はたくさんの愛情をそそがれていたんだなあ、いや、いるんだなあと。祖母の似顔絵も僕は小学三年生まで、妹は中学一年生まで描いた。その後は、大きくなって少し正直めんどくさくなって描いてはいないが今は祖母には電話をよくかけている。特にこの夏は異常に暑いので、家の中でも熱中症になっていないか？水分補給はこまめにとっているのか？めまいはしていないか？と。すると、祖母は反対に、僕と妹は大丈夫か？今日は部活あるのか？自転車を乗る時は車に気を付けるんだよと心配してくれる。本当にありがたい、そして嬉しいと素直に思う。

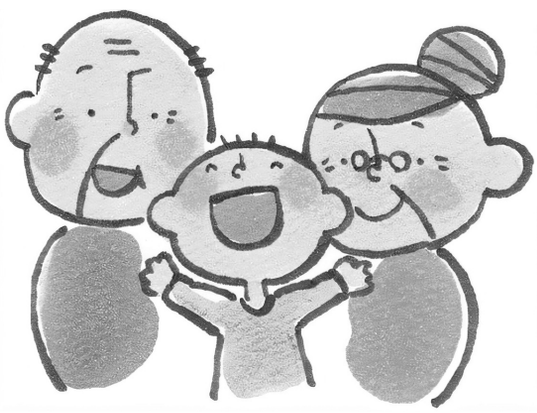
さらにあの一枚の写真から、僕は考えてみたことがあった。僕の未来の家族のこと。今までは、将来、消防士になりたいと、ただその一点だけ思っていたが、その中に未来の家族像が加わるようになってきた。僕が立派な消防士になって安定したら、結婚、そして理想は男の子、そして次に女の子がいるかもなと。僕がたくさんの愛情をそそがれたように、僕も家族を守り、おだやかに笑顔であふれる家庭を作りたい。欲を言うなら、リビングにたくさんの写真、そして、未来の子どもが描いた、かっこいいパパの絵もあったらいいな。

あの一枚の写真から、こんなにも感じることができた。改めて、自分の家のリビングが新鮮に見えた。時には、祖父母から、叱られうんざり思ったり、両親に反抗的な態度をとってしまうこともある

が、少し反省する気持ちがわいてきた。これからは、両親をはじめ、祖父母を大切に僕が守っていこう。

友達も一生の友達と言えるようになったらいいな。特に高校に入って出来た友達は僕にとって宝物のように大切な存在だ。そして、僕が大人になった時、どんな新たな友達ができるだろうかとわくわくもする。

この夏は周りの人達の優しさを改めて感じ、風景が少し変わって見えてきた。当り前に過ごして来たことも当たり前ではない。一つ一つ感謝して過ごしていきたい。スーパーで買ったマグロの刺身もその日はいつも以上に美味しかった。あの一枚の写真、あのご夫婦、お孫さん、みんな、みんな、幸せでありますように。



講評

スーパーで偶然目にした一枚の写真。思わず口元がゆるむとともに、ふと、家族や叔母、離れて暮らす祖母からの愛情を感じ、自身の将来の家族像にまで思いを馳せます。「リビング」「マグロの刺身」といった日常的な語句がキーワードとして、筆者の素朴な書きぶりとともに、作品の温かみを引き立てています。

優秀賞

当たり前ではない日々

十和田工業高等学校　二年　佐々木（ささき）　恋（れみ）　南（な）

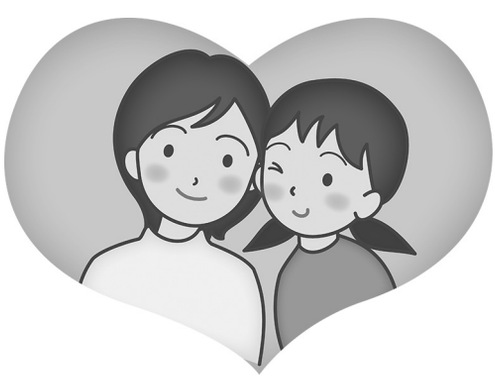
私は母が嫌いだ。そんなこと言うんじゃないって、なんでそんなことを言うんだって、みんなに思われるのだろう。なぜかって？理由はいくつもある。まずみんな疲れているのに、自分が疲れていると家事を押し付けてくるところ、嫌いなお弁当の具を何度言っても入れてくるところ、人には好き勝手言うのに、いざ自分が言われると意味が分からないくらい怒ってくるところ、そして何よりも毎日ぐうたらしているところだ。挙げているとキリがないくらいに母の嫌なところはたくさんある。そんなことでかと、それ以上に母にしてもらっていることがあるだろうと、世間にこの事を話したとすれば、みんな痛い目で見てくるのだろう。

私の周りは皆私の母をいいなと言ってくる。なにがいいのだろう？どこがいいのだろう？言われる度に疑問ばかりだ。みんなのお母さんの方が、優しそうで絶対いいでは無いか。私の母は少し面白く、機嫌がいい時だけすごく優しい、そのくらいしかいいところはない。一日でもいいから、みんなに母と一緒に過ごしてほしいものだ。一緒に過ごせば、みんな私の気持ちを多少は分かってくれるだろう。

私がお母さんと家に居たそんなある日の出来事だった。いつも通りぐうたらしている母の横で私はある疑問がふと頭に浮かんだ。

「ねえねえ、どうしてお母さんはお父さんと結婚したの？」

私は何も考えずに、思っていた事をそのまま問いかけた。その問いかけに対して母は、
「え？なんでだろうね。」
と母は他人の事かのように眉を寄せながら考えていた。そうするといきなり何かをひらめいたかのように、
「でもさお母さんがお父さんと結婚していないと、あなたはこの世に産まれてきていなかったんだよ？」
と言われた。その深く考えさせられる言葉に、心がハッとした。確かによくよく考えるとそうなのだ。私は今までの当たり前が当たり前では無いことに気がついたのだった。気づいていたとは思っていたが、こんなにも真剣に考えたことは無かったのだ。もし母が違う人と結婚していたら、当然自分という存在はここにはないのだから、突然私の口から
「お母さん、ありがとう。」
という言葉がこぼれたのだった。もちろん言わなくてはならないと思った訳ではない、だが気づかないうちに口から出ていたのだった。母は、いきなりなに？というようなとぼけた顔をしながらじっと私を見つめてきた。
　自分でも深く考えたことが無かったが、確かに私は何か悩みがあると、姉妹でも父でもなく、第一に母に相談してしまう。心に限界がくると恥ずかしさなどを捨てて、母の前で声を出して泣いてしまう。嫌なことがあるとすぐに母の前で心の中が空になるまで吐き出してしまう。こんなに嫌いな母にでもいざとなると、やっぱり甘えたくなるものなのだ。なぜなのだろう？私にもよく分からない。でも一つあるとするのであれば、私を一番に分かってくれている存在は母しか居ないからなのではないだろうか。
　私は母が大好きだ。なぜかって？理由はたくさんある。私が嫌なことがあって、相談すると私以上に怒ってくれるところ、私が悲しんで泣いてしまうと、何故か母も一緒に泣き出してしまうところ、嬉しいことを報告すると、自分のことかのように喜んでくれるところ。私の頑張りを誰よりも分かってくれて、最後まで応援してくれるところ、困ったことがあると、どんな手を使ってでも助けてくれるところ、いきなりニヤニヤしながら可愛いと言ってくれるところ、そして何よりも私を本当に大事に思ってくれているところだ。
　母の嫌いなところはたくさんある。本当にたくさんあるのだ。だけれども、それ以上に好きなことがたくさんある。数え切れないほどに。母以上なんて存在しない。自慢の母なのだ。何気ないこの毎日は当たり前なんかではない、毎日の感謝を照れながらも、今日もまた母に伝えよう。呆れられるくらい、笑われるくらい、この感謝の気持ちが一〇〇パーセント母に伝わるまで。



講評

「私は母が嫌いだ」という冒頭文は、一種の衝撃を伴って読者を作品の世界にいざないます。その後、母の嫌いな面をとうとうと語りますが、ある出来事を契機として、実は、母のことが大好きだということに気付きます。母親への感情を赤裸々に語るからこそ伝わる筆者の思いは、どこか共感せずにはいられません。

優秀賞

心のふれあい

十和田工業高等学校　二年　成田（なりた）　春悟（しゅんご）

私は、人との繋がりの中で大切だと思っているものがある。それは、人とのふれあいである。また、人とふれあう事で心が豊かになったり、考えが広まったりするきっかけになるとも思っている。このような考えを持つようになったのは、私が実際に体感した事があるからだ。

人とふれあう機会は様々であると思う。例えば、ボランティア活動や地域のイベント、近所の人との交流などがある。その中でも私は特に、地域のイベントの中で人と関わる機会が多かったと思う。私の地域では年に一度色々な出し物を発表するイベントがあり、そのイベントに参加している手話サークルに所属していた。このサークルは、週に一回集まって活動をしていた。私が所属するきっかけは、祖母が通っていて一緒に参加しようと話を出されたからだ。通い始めた頃は年が近い人が居らず、手話も難しくて空気になじめずに行きたくないという気持ちが出てきてしまった。そんな中、活動が進んでいき年末に差し掛かっていった。まだなじむ事が出来ないまま、一年の活動も締めくくりになり忘年会に参加することになった。忘年会では一人一人活動の振り返りや来年の目標など、様々な事を話し合っていた。そこで、私も勇気を出してメンバーの人に話しかけてみた。メンバー全員私が考えていたのとは真逆で、優しく明るく話してくれた。その時、私は勝手なイメージに囚われていたという事に気が付くことが出来た。それからは、時間いっぱい会話をした。私が初めて耳にするものや知らなかったこと、メンバーについてのことなど色々なことを知れた。今になって考えると、このような何気ない会話も人とふれあうという事であったと思う。やはり、「ふれあい」は人との繋がりのきっかけ、第一歩であると共に一番大切な事であると感じる。

また、私はこの手話サークルで活動することで、言葉を発することが無いふれあいに気付けた。その中でも、手話でのふれあいを一番体験したと思う。手話サークルなので、手話を勉強するのはもちろんのこと、前述したイベントに向けた出し物の練習をする。出し物は、いくつかの童話や流行りの曲を手話で披露するというものだ。この手話の出し物は見ている人も一緒に参加して手話を体験することができる。なので、毎年子どもから高齢の人まで多くの人が、楽しそうに体験してくれた。つまり、一度に多くの人とふれあえたことになると思う。イベント以外でも耳の不自由な方と会話をすることもあった。私は、まだ多くの手話を覚えておらず、ぎこちないものであったが、お互いに楽しみながら会話していたのを覚えている。この体験があったから、今まで考えていなかった新しいふれあい方を見つけられたと思う。人とのふれあいの中で新しい発見や体験など得られるものが多くあると実感した。

ふれあいという字は漢字で書くと触れ合いという字になる。意味は漢字のままの「互いに触れる」というものだ。私はこれまで、触れ合うという言葉は身体的な意味しか持たないと考えていた。しかし、触れ合いの意味をもっと調べていくと、「心を通わせ、親しくつき合う」という精神的な意味を持っていることを知った。このことを知ってから、私はふれあいとは「心と心を互いに触れる」もので

あると考えた。つまり、心の触れ合いだ。私は前述したこと以外でも多くの触れ合いをしてきたと思う。家庭や地域、保育園、小・中学校、そして今と、様々な場所や場面で多くの人と触れ合ってきた。初めての場所などでは不安なども大きかったが、周りの人と触れ合うことで、安心感が出てきたりその環境に慣れていくことが出来た。これからの人生は、新しいことや初めてのことが沢山であると思う。だからこそ、「ふれあい」を大切にして困難などを乗り越えていきたい。また、年齢や性別、出身の国が違っても気軽に楽しくふれあえる社会になってほしいと思う。

講評

祖母に誘われて所属することになった手話サークル。なじむことができず迎えた忘年会で、勇気を出してメンバーに話しかけたことから、世界が広がっていきます。手話も含めた何気ない会話は、心と心が触れ合うことであるという筆者の考えは、人と人とのつながりについて、核心を突いているのではないでしょうか。

優良賞

小さな手から教わったこと

十和田工業高等学校　二年　高渕心華（たかぶちここは）

中学三年生のとき、私は出身の保育園で職場体験をした。保育園は、小さな子どもたちが元気いっぱいに過ごす場所であり、私にとってはまったく未知の世界だった。初めての職場体験ということもあり、少し不安もあったけれど、同時に楽しみな気持ちもあった。

保育園に到着した初日、先生に紹介されると、子どもたちが次々と

「ここはちゃん、遊ぼ！」

と駆け寄ってきた。その無邪気な笑顔とキラキラした目を見て、私の緊張は一気にほぐれた。子どもたちに囲まれると、まるで自分が家族の一員になったかのような温かさを感じた。

最初の仕事は、子どもたちと一緒に遊ぶことだった。なわとびやかけっこ、じゃんけんなど子どもたちはみんな思い思いに遊んでいた。私は一緒になわとび競走をしたり、おままごとをして過ごしていた。三人の女の子が

「ここはお姫様のお部屋だよ。」

と言いながら床で遊んでいた。何もない床の上に架空の部屋をつくっている彼女らを見て、想像力にとても驚かされた。

時には子ども同士で意見が合わず、喧嘩をしてしまうこともあった。「それ私の！」とおもちゃの取り合いになったり、遊び方が違ってぶつかったりすることがあったが、先生が優しく仲裁に入ると、

子どもたちは、すぐに「ごめんね。」と素直に謝り、また仲良く遊び始める姿が印象的だった。彼らの純粋で、すぐに許し合える心の温かさに感動した。

食事の時間もまた、心温まる瞬間だった。小さな手でお箸を握り、真剣な表情でご飯を食べる姿は、どこか微笑ましかった。中には好き嫌いをする子もいた。その子に

「これ食べれたらかっこいいな。」

と言うとピーマンの端を少しかじってくれた。苦手なものを克服しようとする彼らなりの努力があり、それを見守る先生たちの愛情深さも感じることができた。

そして、お昼寝のまえには、絵本の読み聞かせが行われた。子どもたちは私の周りに集まり、大きな目を輝かせながら絵本の世界に引き込まれていった。私が絵本を読み進めていくと、子どもたちはまるで時間が止まっているかのようにじっと集中していた。物語が終わると、彼らから「もう一回読んで！」とおねだりされることも多かった。そのたびに私は、子どもたちの無邪気なお願いに応え、何度も絵本を読み返した。今でも、あの澄みきった瞳は忘れられない。

職場体験が進むにつれて、私は子どもたちとの関わりの中で、ただ一緒に遊んだり、世話をしたりするだけでなく、彼らから多くのことを教わっていることに気づいた。無邪気な笑顔や、素直でまっすぐな心、そして小さな手で一生懸命に取り組む姿。そのどれもが私にとって新鮮であり、大人になりかけている私が忘れかけていた大切なことを思い出させてくれた。

最終日、職場体験が終わるとき、子どもたちが

「ここちゃん、また来てね。」

と言ってくれた。短い期間ではあったが、彼らとのふれあいは、私の心に深く刻まれる経験となった。この体験を通して、私は自分が少し成長できた気がするし、同時に子どもたちの純粋さにふれることで心が洗われたようにも感じた。

これからも、保育園での職場体験で得た学びや子どもたちの笑顔を忘れずに、大切にしていきたいと思う。彼らが教えてくれた、人と素直に接することや小さな努力をすること、どんな環境でも想像力を働かせて柔軟に考えることなどを心に秘めながら生活したい。これからの人生の中で、幸い事や苦しい事、悲しい事がたくさんあるかもしれない。そんな時は、子どものころの純粋さ、柔軟さを思い出して乗り越えていきたい。これからも他者との関わりを、大切にしながら生活していきたい。

優良賞

気づかいの心

十和田工業高等学校　二年　馬場（ばば）　玲人（れいと）

夏休みのある部活帰りにバスへ乗り込んだ。車内は混んでおり、立っているお年寄りや子どもたちが私の目に飛びこんできた。私は席を目指し奥の方へ進んで行くと心が温まる光景が広がっているの

に気がついた。
　その場には、お年寄りとその孫が立っていたのだ。お年寄りは杖を手にしており、少し疲れているように見えたが、そのそばには元気いっぱいの孫が座り、ニコニコとしながら楽しそうにお年寄りの手をギュッと握っていた。孫の手が小さくお年寄りの手を優しく包んでいる光景を見て私は、可愛く見えた。
　しかし、バスが大きく揺れるたびにお年寄りは不安そうな表情をしていた。孫がその様子に気づき、お年寄りの手を握りしめ、
「おじいちゃん大丈夫？」
と声をかけているのを見かけた。その孫の姿に心が温まり、私はお年寄りと孫のやり取りを見ていた。
　すると、お年寄りと孫の近くにいた男性が近づいてきた。その男性はお年寄りと孫を一度見て、しばらく考え込んだ後、自分自身が座っていた席を譲ることに決めた。周りにいた乗客たちもその様子に驚きながらもみんな感心していた表情であった。男性は丁寧な口調でお年寄りに席を譲り、孫に微笑んだ。
　お年寄りは戸惑いながらも、男性から席を譲り受け、孫と一緒に座ることができた。孫は嬉しそうにお年寄りの手を握りしめ、お互いに微笑み合っているのが見えた。男性はその後も立っており、周囲の人達から肩をポンポンとたたかれたり称賛の声が上がっているのがわかった。
　その後も、バスの中では温かい雰囲気がバス全体に広がっていた。お年寄りと孫の間にはより深い絆が生まれた。男性の勇気を持っての思いやりの行動が周囲にも広がっていくのがわかった。私達は、お互いに思いやりを持ち、助け合うことの大切さを改めて感じることができた瞬間だった。
　この出来事を通じて、私達は思いやりの心が広がる光景を目撃することができた。お年寄りと孫、そしてその場にいた男性を通じて、私たちは他人への思いやりと優しさの重要性を再確認し、これから一生忘れることのない体験をできたのだった。
　思いやりの心は日常の中でさりげなく広がっていると私は思う。その小さな勇気と行為が、周囲の人々に影響を与え、温かな空気を広げていく。私たち一人一人が心を開いて他者に寄り添うことで、より豊かで生きやすい社会を築いていけるのではないかと考える。
　お年寄りとその孫、そして男性という異なった世代の人達が集まり、この思いやりの心は、私たちに多くの事を教えてくれた。その出来事を通じて、私たちはお互いに思いやりと優しさを持つことの大切さをもう一度、再確認し、それを実践することでより良く生きやすい社会を築いていけるのだと深く感じることができた。
　この思いやりの心は一人だけじゃ成り立つことがないと思った。一人一人みんなが意識してひとつの行動が次々と周囲全体に伝染していき繋がり、どんどん周囲へと広がっていくと思った。そのみんなが作った輪の中で、私たちはみんなと一緒にお互いに支え合い、助け合うことで、心豊かなふれあいも築いていけると考えている。この出来事を通じて、私たちは思いやりの心が広がる美しい光景に触れ、それを大切にしていくことの重要性を改めて認識した。
　最後に私はあの男性の立場に置かれていれば、あのお年寄りと孫に席を譲っていたかと考えれば譲ることのできないまま、バスを降りていたのかなと思う。自分の気持ちの弱さを押し殺して勇気を振りしぼり、声をかけていきたいなと感じた。バス以外でも常に困っている人を助ける「思いやり」を心がけて生活していきたい。

優良賞

よりよい社会にするために

十和田工業高等学校　二年　瀬川陽奈

私は、助け合いをするなかで一番大切なことは思いやりと感謝の気持ちを持つことだと思います。なぜなら、気持ちがこもっていない感謝を伝えても意味はないし、伝えられた側もあまり嬉しくないと思うからです。また、思いやりの気持ちがなければ困っている人を見ても、助けようという気持ちにならず見て見ぬふりをするかもしれないからです。そうすると助け合いは生まれません。

私は小学校三年生のとき、スーパーで買い物をしているときに日本語が分からず困っている外国人を見ました。私は、「困っていそうだから助けたい」という気持ちになりましたが英語で会話することができるか不安で、話しかけるのを躊躇してしまい、助けられずとても後悔した経験があります。そこで、迷わずに人を助けられる人になりたいと思い、小学四年生のとき、ボーイスカウトに入団することを決めました。ボーイスカウトではキャンプやごみ拾い、募金活動などの奉仕活動を主にしています。グループ活動をするなかで自主性や協調性、社会性、たくましさ、リーダーシップなどを育むことができます。また、海外のボーイスカウトとの交流もあるので国際性を身に付けるだけでなく、多様な文化を学ぶこともできます。そこで私は、色々な力を養い立派な人間になれるように、小学四年生から七年間ボーイスカウト活動に励んでいます。

文頭でも書いたように、私は助け合いにおいて思いやりと感謝が大切だと思います。だから私は、ボーイスカウト活動をするときは必ず思いやりの気持ちを持ち活動に取り組み、そして何年もボーイスカウトを続けさせてくれている両親に感謝しながら活動しています。感謝しながら活動することで、どのような活動でも手を抜くことなく一生懸命取り組むことができます。そして例えば募金活動をするときは、無表情でなにも呼びかけをしていない人に募金をしたいという気持ちにはならないと思うので、ニコニコして明るく呼びかけをするように心がけています。そしてもちろん感謝を忘れずに伝えています。キャンプをするときは、キャンプをする場所を貸してくれている管理者の方や自然に感謝しながらキャンプをしています。

私は、助け合いは片方だけでは絶対に成り立たないと思っています。自分だけがずっと与え続けるより、自分が相手を助けて相手も自分を助けてくれる関係の方が長く続くと思うからです。そしてそっちの関係の方が、お互い対等でいられると思います。このことから、助け合いや思いやりは家族や友達との間でもとても大切です。ボーイスカウトは助け合いをするための団体ですが、家族や友達などの人間関係は助け合いが強制ではないので、その人が困っている友達や家族を見たとき、手を差し伸べることができたら、よりよい関係を築くことができると思います。助け合いをすることで、助けられた相手は嬉しい気持ちになると思います。また、自分自身も感謝を伝えられると喜びや満足感を得ることができると思います。ボーイスカウトで得られるものと違い、家族間や友人間での助け合いは、人間関係を深め信頼を築くことができます。また、コミュニケーションも活発になります。そのため私は、ボーイスカウトでの活動と人間関係での助け合いに努めていきます。

さらに、家族間や友人間だけでなく地域との結び付きも強くしてくれると思います。最近、近いうちに大きい地震が来ると予想されています。地震が起こったとき、地域の人々が協力して物資を分け合ったりなど色々な人と関わることで、物理的支援だけでなく精神的支援にもなると思います。食べる物がなくなったり、誰かと連絡がつかないなど不安なときに誰かがそばにいるということで安心感がうまれ、少しは心の支えになります。

地域での関わりが少なくなり、ＳＮＳが発達し友達などとの関係が薄くなった今だからこそ、助け合いや思いやり、感謝が必要になってくると思います。最近は、対面での会話よりもスマートフォンなどの機器を使用した会話の方が多いように感じます。「ありがとう」は、画面上より直接言うことに意味があると思うので、これを機にスマートフォンでの会話より直接会話する機会を増やしていこうと思います。そして、助け合いはこれからの社会をよりよいものにしていくと思うので、ボーイスカウト活動はもちろん、それ以外の場でも助け合いを積極的にしていきます。

優良賞

四つの言葉と体験談

十和田工業高等学校　二年　小川梨々香

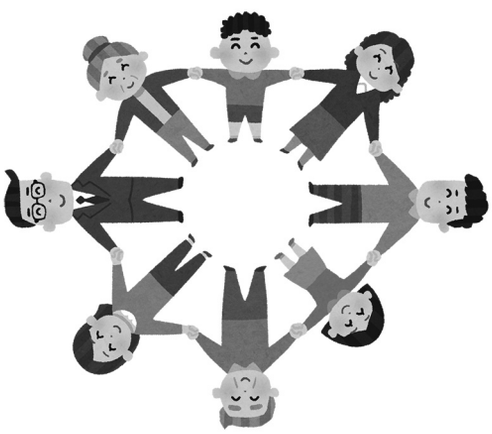
私は、どうしたら様々な生活の場所で生きているすべての皆が暮らしやすい社会になるのか、よく考えることがある。そこで私は自分にできることは何か。また社会全体でできることは何か考えた。

私が通っている学校には、四つの言葉を呪文のように何回も唱え、大切にしている先生がいる。四つの言葉とは「謙虚」「素直」「ユーモア」「感謝」だ。私はこの四つの言葉の意味をよく知りたいと思い、調べたり考えたりしてみた。まずはじめに、「謙虚」とは、自分の能力や立場におごることなく、素直かつ控えめな態度で人に接することをいう。二つ目の「素直」とは、考えや態度、動作がまっすぐなこと。三つ目の「ユーモア」とは、人間生活ににじみ出る、おかしみ。上品なしゃれ。人生の矛盾、滑稽等を人間共通の弱点として寛大な態度でながめ楽しむ気持ちのこと。さいごに「感謝」とは、ありがたく思って礼をいうこと。心にありがたく感ずることだ。四つの言葉を調べて気づいたことは、人生一人で生きていくことは不可能であって、相手があってこその人生なのだということだ。だから人とかかわる時には助け合うことや相手に対して思いやりを持つ気持ちが大切だと思った。自分自身も、あたりまえに生活できていることに対して感謝することを大事にしたいと改めて思った。

今春、私は祖母と東京に旅行に行った。満員電車に揺れながら目的地へ向かう。立って乗っている途中、酔ってしまい、具合が悪く

なった。そのとき、座っていたお姉さんが
「体調大丈夫ですか。ぜひここに座ってゆっくりしてください。」
と言ってくれた。祖母と私は、こんな自分たちを気にかけてくれる素敵な人がいるんだと、とても嬉しい気持ちになった。私はこの瞬間、自分もこのお姉さんのように、しっかりしていて周りに配慮できるかっこいい女性になろうと決心した。この日から、私もバスや電車に乗ったときに周りを見渡して、困っている人がいれば声をかけるようにしている。声をかけて席を譲ったときに笑顔で喜んでくれる姿をみると、自分もこの上なく幸せな気持ちになれる。四つの言葉と同様、助け合い、相手に思いやりの気持ちを持つことで、自分も幸せな気持ちになる。相手も自分も幸せになることができる「思いやり」のパワーを実感した。

改めて、様々な生活の場所で生きているすべての皆が暮らしやすい社会になることを私は望む。そのために私ができることは、まず身近な生活環境で困っている人がいたら率先して行動することをあたりまえにし、人助けをすることだ。他にできることは、募金をして国内だけではなく国外の支援をすることだと考えた。また、一人だけで解決するのではなく、社会全体をよくするためには、全員が人の気持ちを考え、自分がされたらどうかという考えの「思いやり」の気持ちを持って生活するべきだ。



佳作

言葉の温かさ

十和田工業高等学校　二年　舛澤朋音

私は、「思いやり」という言葉について調べました。すると、他人の立場や気持ちに配慮し、相手が快適に過ごせるように振る舞うこと、とありました。私は思いやりというのは困っている人の手助けだと思っていました。ですが、思いやりというのは行動だけではないということを知りました。

私がアルバイトを始めてすぐの頃の話です。私はレジの担当でした。アルバイトを始めてすぐということもあり、レジのやり方を完璧に覚えられていませんでした。また、その日はお店が忙しく新人の私に付いてくださる人がいませんでした。そんな時に私は、お客様から頂いた料金と入力の料金をまちがえてしまいました。その事に気づかず合計をしてしまいました。レシートとお釣りを渡した時に、お客様がまちがいに気づいてくださりました。ですが私一人では対処する事はできないので、店長に状況を説明し、対処していただこうと思いました。ですが、私は焦ってしまい、うまく状況を説明することができませんでした。するとお客様が私に代わり状況を説明してくださいました。それだけでも私は救われたのですが、帰り際に
「頑張ってね、また来るね。」
と言ってくださいました。お会計もできず、さらに状況を説明することすらできず自己嫌悪に陥ってしまっていた私にとって、救われ

た一言でした。そのお客様は私が焦ってしまった時も焦らなくても大丈夫やゆっくりでいいよと声がけしてくださいました。これこそが、他人の立場や気持ちに配慮し相手が快適に過ごせるように振る舞う、ということだと思いました。お客様は、私を手伝ってくれたわけではありません。思いやりは行動だけではなく、言葉でもあるという事を実感しました。何気なく言った言葉でも、その言葉で心が軽くなる人が沢山いるのだと思いました。他にも行事などで、何か決めるとき誰もやりたがらない仕事や競技をやろうとしてくれる人がいました。その時に、じゃあこの仕事は分担したらどうか、と案を出した人がいました。誰もやりたがらない仕事をやろうとした子もやりたくなかった子達も分担することで気持ちが楽になったと思いました。他人の立場に立って物事を考え、相手がどう感じるかを考えた思いやりのある発言だと思いました。

自分は思いやりのある言葉を言えているのかと考えてみました。私は皆が楽になるような案は出せないし、相手を気遣った発言も咄嗟に言える自信がありません。ですが「ありがとう」は言えます。ありがとうは一番簡単に言えて一番気持ちが伝わる思いやりの言葉だと思います。実際アルバイトをしていた時、お客様のありがとうございますで、とても気持ちが楽になります。物を拾った時や、手助けした時のありがとうもやって良かったと思えます。大袈裟に聞こえるかもしれませんが、その日の嫌な事や疲れが吹っ飛ぶくらい、嬉しい言葉です。

私は、「思いやり」というものを深く考え過ぎていました。席を譲ったり、荷物を持ってあげる事だけが思いやりではありません。ありがとうや、無理しないでねと言うのも立派な思いやりだと思います。行動するというのはとても勇気がいることだと思います。なので、まず気軽に言える言葉で思いやりの気持ちを示したいと思いました。些細な言葉でも、相手にはしっかり伝わると思います。思いやりを持って行動、発言をする事で、相手の気持ちは、とても楽になると思います。それと同時に自分自身も心が温かくなり、満足感を感じる事ができます。思いやりは、相手だけではなく、自分自身、周りにも良い影響を及ぼすと思います。「思いやり」を意識せず、自然に行えるようになれたら、それはとても素敵なことです。そのためには、毎日、日常での小さな場面で思いやりを実践することで、それが習慣化され、いつか意識せずとも行えるようになっていくと思います。そうなるように、小さな行動、発言を積極的に行いたいです。

佳作

先生は聖徳太子

十和田工業高等学校　二年　牛崎（うしざき）　潤之輔（じゅんのすけ）

私は、とある用事があり私が卒園した幼稚園に行った。用事が済んだ後に先生が

「子ども達の部屋で一緒に遊んでおいで。」

と言ってきたので私は子ども達の居る部屋へと向かった。扉を開けた瞬間、子ども達が一斉に私の事を囲んできた。すると、ある一人の子が「パズルやろう。」と言った途端、「私と折り紙やろ。」や「この紙で剣作って。」などとそれぞれ違う願いを言われた。三人だけ

でも大変だ。しかし遊んでいると徐々に「これやろ」という願望がヒートアップしていき、最終的には六～七人同時に遊んだ。私よりも年下でそして大人数で遊ぶと普段友達と遊んだり、会話したりする事の何十倍も疲れる。この時、私は「先生は毎日毎日大変な思いをしている」という考えと、「まるで聖徳太子のようだ」という考えが思いついた。

なぜ先生の事を聖徳太子のようだと考えた理由は二つある。

一つ目は、聖徳太子は一度に十人の声を聞き分けたという話があるからだ。たとえ相手が子どもでも大人でも、一度に十人の声を聞き分ける事は非常に難しい事だ。それを毎日やりとげている先生は本当に尊敬する。

二つ目は、聖徳太子の性格が先生にとても合っているからだ。聖徳太子の性格を調べてみると、「人当たりがよく柔和で、時に冗談を言って周囲を和ませる」と出てきた。人当たりがよく、やさしくて周囲を和ませる事ができる先生は聖徳太子のようだ。

私がこの経験をして思った事は、小さい子は「少し待っててね」が通用しなく、どんどん遊びに誘う為、遊んであげる側からすれば体力が持たない事だ。いくら小さい子でも時には頭に来ることもあると思う。しかし怒鳴る事なくやさしく注意している先生を見ると私が幼稚園の時もこのような感じでグッと我慢してたんだろうなと申し訳ない気持ちでいっぱいになる。私が幼稚園の時を振り返ると年少の時には、幼稚園に行きたくなく、幼稚園に着いて中に入る寸前に大泣きして暴れてしまい毎日迷惑をかけてしまった。年中に上がると落ち着いて生活できるようになり始め特に目立つような悪い事はしなかった。そして年長に上がり幼稚園が大好きになった。そのせいか、年中の時とは逆で落ち着きがなくなったり、先生にしつこく話しかけてしまったりと慣れから悪い所に発展してしまった。落ち着きの無さから怪我が増えたり、ルールが守れなかったりして先生だけではなく親にもたくさん迷惑をかけてしまった。

それから四年後。小学校四年生になった私は自立し始めた。小学校三年生までは何でも親や先生に頼ってばかりだったが少しずつ大人になってきた。そのおかげで大きなトラブルも起こさず、いい意味で特に何もなく卒業までの残り二年を充実して過ごすことができた。

私はこの経験から、先生の偉大さ、そして最後まで正しい方向に育ててくれた先生への感謝の気持ちを忘れずに生活していこうと思った。もう一つ思った事は、子どもと関わる事はとても楽しい事だが、難しく、時には辛い事もあるという事を身をもって経験できた。ただ遊ぶだけなら誰でもできる。しかし子どもとの関わり方を考えながら毎日お世話している先生は何度も言うがすごい事を行っていて尊敬でしかない。もし私が今回のように急に子ども達と遊べと言われても何をどうすればいいかが分からない。特に私は話した事のない相手と話す事が苦手だ。だからコミュニケーション能力をよりつけていきたい。そして今回のように何も考えずに関わるのではなく、考えて発言や行動をし、手本になれるようになりたい。これから生きていく中で相手が何人でも聞きとってあげることは重要だと思った。そのためには、同時に喋っていて聞きとれなかったら聞き返すこともできるし、「一人ずつ喋ってほしい」などと話すこともできるので工夫してコミュニケーションをとっていきたい。私は先生のように聖徳太子にはなれなくても、聞き上手になりたいと思った。子どもだけでなく友人、先生、家族との関わり方やつき合い方に気をつけて行動していきたい。